

命題の発話者とは誰か

乗立 雄輝

本稿では、パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) が「一般性」と「曖昧性」という概念について展開した議論を考察する。そこで、特に問題とされることの多い「一般的な命題には排中律が適用されず、曖昧な命題には矛盾律が適用されない」という言説について、それを探究の過程における、ある命題の性格の変化として捉えるならば、整合的な解釈が可能であるということを示す。そのことによって、パースの「可謬主義」(fallibilism) の存在論的考察へと向かう手がかりを得ることを目指す。

1. 問題の背景(1) 一般性と曖昧性

パースが『モニスト』(*The Monist*) 誌上で 1905 年に発表した「プラグマティシズムの成果」(Issues of Pragmatism, 1905, CP.5.438-63, EPII.346-359¹) の中にある「一般性」(generality) と「曖昧性」(vagueness) をめぐると一節は、その奇妙に思える内容から様々な議論を呼んできた。その議論の対象となる一節をやや長くなるが、引用する。

ある記号(この表現によって外的な記号だけではなく、いかなる種類の思考をも指すことにする)がいかなる点においても客観的に不確定(indeterminate, つまり記号それ自身によってはその対象を確定できない)であるとき、その記号の対象をさらに確定していく権限を解釈者(interpreter)に委ねる限りにおいて、その記号は客観的に**一般的**(*general*)である。[中略]いかなる点においても客観的に不確定である記号が客観的に**曖昧**(*vague*)であるのは、その記号が他の考えられる記号によってさらに確定される余地を残している、あるいは、少なくともその役目を解釈者に任じていないときに限る。(CP.5.447, EPII.350-351。引用文においてゴシック太字は原文イタリック強調。以下、同様。)

おそらく、より科学的(scientific)な定義の対とは以下のようなものとな

るだろう。なんであれ**一般的**であるのは、それに排中律 (principle of excluded middle) が適用されない限りであり、なんであれ**曖昧**であるのは、それに矛盾律 (principle of contradiction) が適用されない限りである、と。したがって、「いかなる命題であれ、**一度その命題の対象が確定されたならば** (*once you have determined its identity*)²、それは真か偽のいずれかである」ということが真であるにもかかわらず、**それが不確定なままに留まり、したがって命題の対象を欠いている限り** (*so long as it remains indeterminate and so without identity*)、そのようないかなる命題も真であるか、もしくは偽であるか、が真でなければならないということはない。同じように、「**私**がその対象を既に**確定した** (*whose identity I have determined*) 命題が同時に真であり、また偽でもある」ということは偽であるが、それが確定されるまでは、ある命題が真であり、かつ、その命題が偽であるということをも真と考えてよい³。(CP.5.448, EPII. 351)

前半の文章 (CP.5.447) を (α) と呼び、後者 (CP.5.448) を (β) と呼ぶことにすると、それぞれは次のように説明できるだろう。

(α) は、「記号の対象を確定する権限が解釈者 (interpreter) に委ねられているものが一般的 (一般性を有する記号もしくは命題) であり、その権限が発話者 (utterer) に委ねられているものが曖昧 (曖昧性を有する記号もしくは命題) である」という主張である。

まず、一般性 (generality) という概念についてパースの言葉を借りて敷衍すると、「人は死すべき存在である」(Man is mortal.) という命題が発話者から発せられたとき、その「人」にどの個体をあてがうかは解釈者の手に委ねられており、発話者はそのテストにさらされなければならない。つまり、解釈者がこの命題を否定するような「人」(個体) を示したとき、発話者は自分の命題の非を認めねばならない。これがパースの考える「一般性」という概念である。

それに対して曖昧性の場合、これもパースの挙げる例を用いると、ある女性が「誰とはいいませんが、ある男は少々うぬぼれているようです」(A man whom I could mention seems to be a little conceited.) と語ったとき、その「ある男」とは、まさにその女性が話しかけている男性を示唆しているものの、その男性が「それは私のことですか？」と女性を問い詰めたとしても、その女性は「いえ、別にあなたのことを言っているわけではありません」とのりくらしと受け流すことができるのである。パースはそれを「あらゆる発話は、自然に、その発話をさらに

説明する権利を発話者に担保している」(Every utterance naturally leaves the right of further exposition in utterer, CP.5.447, EPII. 351) と述べる⁴。

2. 問題の背景 (2) 排中律と矛盾律

さて、 (α) よりも問題含みであり様々な議論を巻き起こしているのが、パース自身によって (α) よりも「より科学的な定義の対」(more scientific pair of definitions⁵) として提出される (β) の主張である。

(β) は、単純に「排中律が適用されない限り、なんであれそれは一般的であり、矛盾律が適用されない限り、なんであれそれは曖昧である」と述べることができよう。しかし、多くの論者が疑念を呈しているように、この主張は直観にそぐわないように思える。

たとえば、 (α) の定義に登場した「人は死すべき存在である」という一般性を表すとパースが考えた命題は、真か偽のいずれかであると考えるのが妥当と思えるし、曖昧性を表すと考えられた「誰とはいいいませんが、ある男は少々うぬぼれているようです」という命題が、同時に真でも偽でもあるというのは端的に矛盾しているように思われる。

この問題について異なるアプローチを提示したウィリアムソン、レーンの議論を、これからの論者の議論の前提になるものとして取り上げたい(Williamson 1994, Lane 1997)。この両者を取り上げるのは、 (β) の主張を額面通りに受け取るか(ウィリアムソン)、それとも、そこに解釈による修正を加えることで古典論理との整合性を保つ(レーン)か、という両極端の立場が明確に見て取れるからである。その上で論者が採る立場は、レーンが修正を施した上での再解釈には説得力があるものの、この主張がなされたパースの論文「プラグマティズムの成果」(Issues of Pragmatism, 1905, October) と、その直前に書かれた論文「プラグマティズムとはなにか」(What Pragmatism Is, 1905, April) との関係を考えるならば、むしろウィリアムソンの解釈の方が妥当で、そのことはレーン自身の最近の著書(Lane 2018)における議論の展開とも整合的だと考えるからである(この点については、後述する)。

さて、ウィリアムソンはその著書で、フレーゲ、ラッセルと並んでパースを「曖昧性」(vagueness) に着目した哲学者として取り上げ、ある程度の分量を割いてパースの議論についての考察を行っている(Williamson 1994, 46-52)。ウィリアムソンは「曖昧性」に対するフレーゲとパースの姿勢の異なりを「フレーゲにと

って曖昧性は探究の出発点で除去されるべきものであったのに対し、パースにとって曖昧性とは探究の終着点の前で除去されるべきものであった」と指摘する (ibid, 46)。その理由を、「フレーゲの観点においては、正確な言語を持つまでは、われわれは信頼できる推論が可能ではない。パースの観点では、われわれの言語は常に曖昧であらざるをえない」(ibid.) と述べた上で先述の (α) について考察を施し、さらに (β) について「一見して、その定義は古典論理に対する根底的な挑戦のように見える」(ibid, 51) としながらも、ウィリアムソンは、レーンの言葉を借りるならば「額面通りに」(at face value, Lane 1997, 680) にパースの (β) の主張を受け入れる。

ウィリアムソンは (β) を「命題が真または偽であるとき、それは排中律を満たし、真かつ偽であることがないならば、それは矛盾律を満たす」(Williamson 1994, 51) と解釈した上で、「いかなる命題も二つの原理[排中律と矛盾律]を満たすが、問題となっている命題が不確定 (indeterminate) であるとき、それには二つの原理が適用されない」(ibid.) と結論づける。この解釈はパースの論述に沿っている点でも妥当であろう。すなわち、ウィリアムソンは、パースがイタリックで強調(本論ではゴシック太字強調)して条件を明示している「一度その命題の対象が確定されたならば」一般的な命題には排中律が適用されるものの、それが「不確定なままに留まり、したがって命題の対象を欠いている限り」その命題には排中律が適用されず、それを一般的な命題と呼んでいるという点を重視しているのである。それと同様に、「私がおの対象を既に確定した」ならば、ある命題が真であると同時に偽であるということもあり得ないが、そのような確定がなされる以前においては、その命題には矛盾律が適用されず、そのような命題が曖昧な命題であるとウィリアムソンは解釈している。

しかし、このウィリアムソンの解釈をレーンは斥ける (Lane 1997, 680⁶)。その最大の理由は、パース自身が条件を明示していない場合においても、一般的な命題に命題には排中律が適用されず、また、曖昧な命題には矛盾律が適用されないという例が多々あるからとしている (ibid.)。

けれども、レーンがウィリアムソンの解釈を斥けるのは、それ以上に、パースの議論と伝統的な古典論理との整合性を保つためであろう。それは、このパースの議論(特に一般的な命題に排中律が適用されないという点)に二値原理 (principle of bivalence) を拒絶する意図を読み込むスキッドモア (Skidmore 1982) を強く否定していることから窺われる (Lane 1997, 680-681⁷)。

そこで古典論理、すなわち、排中律、矛盾律、そして二値原理との整合性を維

持したままパースの(β)の主張を解釈しようとするレーンが採用する戦術は、(ウィリアムソンとは異なり)パースの(β)の主張を額面通りには受け取らず、一般的な命題に排中律が適用されない、すなわち、それは真でも偽でもないという主張、さらには、曖昧な命題には矛盾律が適用されない、すなわち、それが同時に真でも偽でもあるという主張を、パースが行っていないということを立証するというものである。

ここでレーンが行っているパースの手稿にも照らし合わせながらの綿密な考察を詳述する紙幅の余裕がないため、結論だけを概括する。そのレーンが行っている作業とは、排中律に登場する「 p or not- p 」の否定にあたる部分を「外的」(external)と「内的」(internal)な否定に分け、パースは後者の内的否定を対象にしていたと解釈するものである(Lane 1997, 684f. 特に 686)。外的否定とは、たとえば「 S が P である」ということはない(it is not the case S is P)であり、内的否定とは「 S は P ではない」(S is not P)というものである(Lane 1997, 686)。これらを排中律に適用するならば、

[排中律：外的否定] (Law of Excluded Middle, External Negation : LEM_E)

いかなる「 S は P である」という命題についても、「 S は P である」か「 S は P である」のではない、かのどちらかであるというのは真である。

[排中律：内的否定] (Law of Excluded Middle, Internal Negation: LEM_I)

いかなる「 S は P である」という命題についても、「 S は P である」か「 S は P ではない」かのどちらかであるというのは真である。(ibid.)

レーンの解釈を敷衍すると、パースが一般的な命題、たとえば「すべての人は死すべき存在である」([All] men are mortal.)に(LEM_Eではなく)LEM_Iが適用されることを否定するのは、一般的な命題が真でもなければ偽でもないからではなく、「すべての人は死すべき存在である」と「すべての人は死すべき存在ではない」の両方が偽である可能性があるからである(Lane 1997, 690-691)。

同様に矛盾律にも同じ解釈を当てはめるならば、

[矛盾律：外的否定] (Law of Non-Contradiction, External Negation : LNCE)

いかなる「 S は P である」という命題についても、「 S は P である」かつ「 S は P である」のではない、は偽である。

[矛盾律：内的否定] (Law of Non-Contradiction, Internal Negation : LNC_i)

いかなる「SはPである」という命題についても、「SはPである」かつ「SはPではない」は偽である。

となる (Lane 1997, 686)。そこで、パースが曖昧な命題、たとえば「ある哺乳類は卵を産む」に LNC_i を適用することを否定するのは、曖昧な命題が真かつ偽であるからではなく、曖昧な命題とその内的否定、すなわち「ある哺乳類は卵を産む」と「ある哺乳類は卵を産まない」の両方が真である可能性があるからである (Lane 1997, 691。哺乳類の例は論者による)。

3. レーンの解釈に対する批判的考察

このようなレーンの解釈は、綿密なパースのテキスト分析に基づいているだけあって説得力がある。また、ウィリアムソンが、パースの主張が「一見して、その定義は古典論理に対する根底的な挑戦のように見える」と述べたのとは反対に、古典論理との整合性、特に排中律の否定⁸から生じると考えられる二値原理の放棄というリスクを回避することができるという点でも魅力的である。

しかし、本稿で論者は、あえてウィリアムソンのように、この(β)テーゼを額面通りに受け取る方向の解釈を示したい。けれどもそれは、ウィリアムソンがいう「古典論理に対する根底的な挑戦」をパースが試みていると考えているからではない。そうではなく、パースが(β)で示そうとしているのは、実際の探究の場面、特に実験的状況における命題の働きと振る舞いについての考察だからだと考えるからである。以下、そのような解釈の方向性を採った理由と、それへの鍵を列挙しながら議論を進めていきたい。

(1) 「より科学的な定義の対」としての(β)とはどういうことなのか？

パース自身が(α)を述べた後、(β)のテーゼを提出するとき、「より科学的」(more scientific)な定義と称していることには以前に触れた。比較級であることから(α)に比べて「科学的」であることは自明だと思われるが、扱われている内容、特にレーン的な解釈に則れば、それは「論理的」(logical)と呼ぶのに相応しいはずであるが、なぜわざわざパースは「科学的」と呼んでいるのだろうか。

やや迂遠ではあるが、ヒントッカによるパースへの言及 (Hintikka 1988) にヒントがあると論者は考える⁹。ヒントッカは自身のモデル理論およびゲーム理

論的アプローチの先駆者としてのパースに対して、シュレーダーと並んで一定の評価を与えつつも、自身の目指すアプローチの助けにはならないということを次のように述べる。

パースとシュレーダーがなぜゲーム理論的アイデアを十分に展開することに失敗したのかということについて疑念を持つことは可能である。パースはゲーム（私 [ヒンティッカ] がこれまで意味論的ゲームと呼んできたもの）が量化の意味と関連があるということについて先鋭的なアイデアを持っていた。しかし、彼は、それらのゲームがどれだけ正確に真理の概念と結びつくのかということについて、完全な明晰さまでには到達していない。探究の理想的限界（*ideal limit of inquiry*）、おそらくは探究ゲーム（*inquiry-game*）の限界としてのパース的な真理概念のアイデアはわれわれにとっての助けにもならないし、パースの助けにもならなかったのである。（Hintikka 1988, 29）

パース的な真理概念、すなわち探究が十分に進んでいった先の理想的な共同体によって抱かれる信念の限界点として真理を捉えるという立場が、ヒンティッカのアプローチにとって足かせになることは十分に理解できる。しかし、その反面、パースにとっては（ α ）によって示されるようなゲーム理論的意味論とは（ β ）にとっての準備段階にすぎず、それ単独で十分に展開する企図もなければ、必要もなかったと考えることもできる¹⁰。言い換えるならば、（ α ）で示されているのは一般性と曖昧性についての意味論的・論理的定義であって、それを一つの準備段階・道具としてなされるのが（ β ）の科学的探究の場面における定義なのである。この（ β ）を科学的探究の場面における一般性と曖昧性の定義として考えることの内実については後で述べたい。

（2）曖昧な述語の真理条件、そして、自然と実験家

紙幅の関係で本稿では詳しく述べることができなかったが、パースは命題に現れる述部の一般性や曖昧性についても考察しており、それについてレーンは主部について行ったのと同じような分析を試みている。それを敷衍すると、「誰々は長身である」（*X is tall.*）、「それは多すぎる」（*Y is too much.*）のような曖昧な命題の場合、このままの状態であれば、どの程度を〈長身〉と見なすのか、どの程度を〈多すぎる〉と見なすのかは発話者にその権限が委ねられている。しかし、それはまったく恣意的というわけではなく、「誰々は〈ある意味では〉長身である」「そ

これは〈ある意味では〉多すぎる」という文章として考えられ、相変わらず曖昧ではあるものの、この曖昧な述定は、述語の「正当な意味」(legitimate sense)を値として持つ存在量化文としてパースは理解していたとレーンは述べる(Lane 1997, 694-6¹¹)。

しかし、ここでレーン自身による反省的な問題提起が行われる(Lane 1997, 701 note14)。それは、曖昧な述定¹²の「正当な意味」をどのように理解すればよいのかという問題であり、これは(1)でヒンティッカが指摘している問題ともつながる。具体的には、曖昧な述定の真理条件を、パース的な真理の定義、もしくはパースが強調する探究の進展に従って概念の意味が成長していくという事態と整合的に説明できるのか、という問題であるとレーンは指摘する(ibid.)。この問題は、パース自身が以下のような形で示唆していたと論者は考える。

肯定も否定もそれら自身では、これらの概念〔一般性、曖昧性、確定性(determination)〕に影響されることはないが、肯定と否定との間の境界線について一見して明確な観念を持つことができる事態があるということは注目されるべきであろう。たとえば、ある平面上の一点は、その平面のある領域の中にありうるし、その外にもありえ、その境界線上にもありうる。このことが、一般的に言って、肯定と否定との中間領域についての非直接的かつ曖昧な概念の存在について教えてくれるし、その結果として、確定性と不確定性との間にある中間的なもしくは生成しようとしている状態(nascent state)の存在を教えてくれるのである。同様の中間領域は一般性と曖昧性との間にもあるに違いない。(CP.5.450, EPII.353)

この抽象的な文章の真意を読み取ることは難しいが、パースが、確定性と不確定性、一般性と曖昧性を固定的なものとして捉えることを戒め、その間の中間領域の存在を認めねばならないと考えていたことは明らかであろう。ということは、曖昧な命題もまた一般的な命題になり得るし、その逆も同様ということである。これは先のレーンの問題提起の中に登場する「探究の進展に従って概念の意味が成長していくという事態」に他ならない。それでは、そのような事態がどの場面で起こるかというならば、実際の科学的探究の現実、よりパースの考えに近く述べるならば、「実験」(experiment)の中であろう。このような事態について、本稿が主として取り上げた「プラグマティズムの成果」(Issues of Pragmatism, 1905, October. 以下、IPと略)の半年前に書かれた論文「プラグマティズムとはなにか」

(What Pragmatism Is, 1905, April. 以下、WPI と略) の中の次の一節が手がかりを与えてくれる¹³。これは、哲学的な素養はあるが、プラグマティズムに対しては懐疑的な「質問者」の問いかけに対して、プラグマティスト (もちろんパースの分身である) が答えるという架空の対話に登場する応答の一つである。

[質問者]

プラグマティズムが徹底した現象主義 (a throughgoing phenomenalism) であるということは分かりました。しかし、なぜあなたは、すべての観察に基づく科学を含めた考察ではなく、実験的な現象のみに自身の考察を限定しようとするのでしょうか？実験とは、結局のところ、意思疎通が取れない情報提供者 (uncommunicative informant) です。実験が詳しく語ってくれることは決してなく、「はい」もしくは「いいえ」と答えるだけです。というよりも、通常、実験は「いいえ！」と一言で吐き捨てるか、せいぜい、「いいえ」と言うことを拒絶するために、不明瞭にぶつぶつ呟くのが関の山ではありませんか ([it = experiment,] at best, only utters an inarticulate grunt for the negation of its “no.”)。典型的な実験家 (experimentalist) は、観察者 (observer) にはまったく及びません。自然誌を学ぶ人 [博物学者] に対して自然 (nature) は自身の秘めたる宝物を明らかにしてくれますが、その一方で、自然 (she) は詰問攻めをする実験家に対しては、彼が望むものを隠したままにしておくのです。

[以下略]

[プラグマティスト]

なぜなら、「徹底した現象主義¹⁴」という教説がプラグマティズムの一種になることはあり得ても、プラグマティズムは「徹底した現象主義」に限定されるものではないからです。確かに、現象の**豊かさ** (richness) は現象の感覚的な質の中に在ります。しかし、プラグマティズムは諸々の言葉や一般的な観念 (general ideas) の現象的な等価物を定義しようなどとは考えず、それとは反対に、言葉や一般的な観念にまつわる感覚的な要素を排除し、それらの合理的な目的 (rational purport) を定義することに努め、この言葉や一般的な観念の有する合理的な目的を、問題となっている言葉や命題のもつ目的的な意味 (purposive bearing) の中で見つけようとするのです。(CP.5.428, EPII. 341)

ここで、肯定と否定、そして、それを実験が不明瞭にしか語ってくれないということを、パースが架空の質問者の言葉を借りて述べていること、さらにパースがプラグマティストの言葉を借りて説明しているのは「実験」というもののパース的な理解であることに注意してほしい。そして、自然誌を学ぶ人に対して自然(nature)は自身の秘めたる宝物を明らかにしてくれるが、その一方で、自然(she: 当然、女性名詞として代名詞化される)は詰問攻めをする実験家に対しては、彼が望むものを隠したままにしておくという表現にも注意を払いたい。

ここで(α)における「曖昧性」の具体例としてパースが、ある女性が「誰とはいいいませんが、ある男は少々うぬぼれているようです」と語ったとき、その「ある男」とは、まさにその女性が話しかけている男性を示唆しているものの、その男性が「それは私のことですか?」と女性を問い詰めたとしても、その女性は「いえ、別にあなたのことを言っているわけではありません」とのりくらしとかわすことができ、パースはそれを「あらゆる発話は、自然に(naturally)、その発話をさらに説明する権利を発話者に担保している」とIPで述べていたことも思い出してほしい。

ここから次のような仮説を立てることは牽強附会ではないし、むしろ、WPIとIPの二つの論文の先後関係、そして、パースが科学的探究というものをどのように考えていたか、そして様々な議論を巻き起こしてきた(β)のテーゼを鑑みるならば、むしろ説得力を持つと論者は考える。つまり、1905年の四月に発表されたWPIに登場する「自然」と「実験家」とは、半年後のIPに現れる「発話者」と「解釈者」に他ならない、ということである。すなわち、曖昧な命題を発して実験者(解釈者)からの詰問をのりくらしと受け流しながら、その曖昧な命題を確定する権限を有する発話者である「自然」の姿が二つの論文で異なった表現で登場しているのである。そして、その自然に対して、その感覚的要素に惑わされることを警戒しながら、合理的かつ一般的な意味をなんとかして獲得しようとしているのが実験者、すなわち、IPにおける解釈者に他ならない¹⁵。

したがって、本稿のタイトル「命題の発話者とはだれか」という問いに対する答えは「自然」、しかし、ヒンティッカの言葉を借りるならば、「探究ゲーム」において解釈者(実験家)と厳しい対話を繰り広げる当事者としての「自然」である。すなわち、WPIで示された自然と実験家の関係について、IPがより具体的な内実を明らかにすることで応答しているという関係がそこに浮かび上がるのである。

4. 自然という「発話者」、実験家という「解釈者」

それでは、IPの(α)に登場する「発話者」を自然、そして「解釈者」を実験家としたとき、どのような光景が見えてくるのだろうか。

それはまず、(β)「排中律が適用されない限り、なんであれそれは一般的であり、矛盾律が適用されない限り、なんであれそれは曖昧である」というテーゼを、レーンが解釈を施したように古典論理、特に二値原理との齟齬を来さないように解釈するのではなく、ウィリアムソンのように額面通りに受け取るという解釈へとわれわれを促す。

というのも、もしレーンのような解釈を受け入れるならば、彼自身が反省的な問題提起で示していたように、探究の過程において概念、そしてそれを含む命題の意味が成長・変化していくというパースが重視していた事態を捉え損なうからである。たとえば、パースが一般的な命題の例として挙げていた「人は死すべき存在である」(Man is mortal.)に「すべての」(all)という言葉が欠けているのには相当な理由がある。というのも、この命題は、探究のどの過程に現れるかによって、曖昧な命題にもなりうるし、一般的な命題にもなりうるからである。そして、この曖昧な命題が探究の端緒において発せられたときの発話者は「自然」であるが、その命題を、実験を通じて確かめた末に一つの結論として、すなわち一般的な命題として発話するのは、もはや自然ではなく、それまで解釈者の位置にあった「実験家」に移っているのである。

つまり、命題の有する性質が、探究の過程において曖昧性から一般性へと変化していくとき、当初は発話者であった自然と、それを解釈する側であった実験家の地位が逆転し、実験家が一般的な命題の「発話者」となり、その命題を「解釈者」である自然からテストされる(つまり反証の過程に入る)というプロセスを踏むことになるのである。

たとえば、探究の端緒において発話者としての「自然」から「人は死すべき存在である」という曖昧な命題が提示されたとき、解釈者としての「実験家」はさまざまな詰問(つまり、自然への実験的介入)を行うことにより、曖昧な命題をより一般的な命題へと彫琢することを目指して行くであろう。しかし、その探究の過程がある程度の結論にたどり着いたとき、これまで解釈者であった実験家は、「人は死すべき存在である」という一般的な命題の発話者へと立場を変える。そこで一般的な命題が、それを確定する権限を解釈者の側に許すものであるとしたとき、その命題に対する「反証」という解釈を施すのは、先に発話者であった自

然の側なのである。

このような科学的探究のプロセスに則るならば、パースの(β)「排中律が適用されない限り、なんであれそれは一般的であり、矛盾律が適用されない限り、なんであれそれは曖昧である」というテーゼは、ウィリアムソンのように額面通りに解釈する方が、整合性が保たれるであろう。つまり、探究の当初において「人は死すべき存在である」という命題が仮説という形で提示されたとき、それが実験という具体的な探究の過程に入る前であるならば、それが仮説である以上、当然のことながら、それは真でもあり、偽でもあるという不安定な位置づけを持つ。しかし、その探究が結論にたどり着き、「人は死すべき存在である」が一般的な命題として実験家の側から発せられたならば、それは未だ、他の解釈者そして自然からの解釈(確定)を施されていない以上、いまだ真でもなく、偽でもない、すなわち排中律が適用されていない段階にあると考えるのが妥当ではないだろうか。

言い換えるならば、論者がウィリアムソンの解釈を支持するのは、それが古典論理への挑戦であるからではなく、探究の過程において、ある命題が帯びる性格が変容していく「自由」を彼の解釈が許容するからである。逆に、レーンの解釈は、その古典論理、特に二値原理との整合性を保つという点において魅力的ではあるが、(レーン自身の反省的な問題提起でも予見されていたように)探究の過程で概念や命題の意味が変化するという事態に対応できない点で「不自由」な解釈であるとする。

5. 真理と実在

さて、実のところ、レーンは1997年の論文から21年を経て出した著書において、それ以前の主張に重要な変更を加えている。それは、パースが、最終的には(レーン自身が1997年の時点ではその遵守を重視した)二値原理を部分的に放棄していると論じている点である(Lane 2018, 139, chapter7)。

それは現在主流になりつつある、フックウェイ、ミサク、アトキンらによる、後期になってパースが「真理と実在」との関係に重大な変更を加えたという論点に対する批判として現れる(Lane 2018, 136, 169, Hookway 2000, Misak 2004, Atkin 2016)。

従来、レーン、そして論者も支持する、パースによって示された真理と実在との関係は「真理の説明に関する表象主義的観点」(representationalist aspect of the account of truth)もしくは「実在性という觀念のプラグマティックな明晰化」

(pragmatic clarification of the idea of reality) とされてきた (Lane 2018, 136)。それは、それぞれ、真なる信念は実在の世界を表象している、そして、実在とは真なる信念において表象されるものであり、その信念とは探究によって固定されるであろうものである、というパースの学説である。

しかし、近年、フックウェイ、ミサク、アトキンらによって、上記の真理と実在に関する教説はパースの前期哲学によって提示されたものであって、後期においては、真理と実在との間に距離を置く姿勢が見られるという解釈が支持を集めつつある。端的に言うならば、それは真理（真なる信念）と実在との表象主義的な対応関係を後期のパースが放棄したという解釈である。それはミサクの「パースにとって真理は不確定的であるかもしれないが、その根底にある実在は確定的である」(Misak 2004, 186¹⁶) という主張に現れているとレーンは述べる (Lane 2018, 136)。

これに対してレーンは、「パースは、ある命題が不確定 (indeterminate) な真理値を持ち得るのみならず、その〈根底にある実在〉 (underlying reality) も同様に不確定でありうると主張していた」と批判する (ibid.)。これはパースが一貫して表象主義的な説明とプラグマティックな真理と実在との関係を維持していたと考えるならば、当然の帰結であるし、論者もこのレーンの主張に同意する。この路線に従い、レーンは 1997 年の時点では忌避していたパースによる二値原理の放棄を、2018 年の著書においては部分的に認めることになるのである。

しかし、そうだとするならば、古典論理、特に二値原理との整合性を保つことを主眼としていた 1997 年の主張には改訂が加えられるべきだと考えられるが、レーンは、パースによる最終的かつ部分的な二値原理の放棄と、彼による一般的な命題に排中律が適用されないことには関係がないと述べる (Lane 2018, 139 note6)。ここに論者はレーンの解釈の不徹底さを見るが、それと同時に、パースのいわゆる「可謬主義」 (fallibilism) をめぐる問題が浮かび上がってくる¹⁷。

パースが考える可謬主義とは、単に「これまで正しいと思われていたことが、後になって間違っていたと分かることもある」というレベルに留まるものではない。伊藤邦武の言葉を借りると、パースの主張は「人間の知識は原理的に确实・確定的なものとはなり得ないという、知識に関する可謬主義と、この可謬性は単に認識論的反省による規定にとどまらず、一切の存在についての規定でもあるという、存在論上の主張」だということになる (伊藤 1985, 6)。つまり、ある探究の時点において、ある知識 (命題) が真であるのは、それが実在を正しく表象しているからであるが、その実在そのものが変化するならば、これまで真であった

知識が偽となることに何の不思議もない。これが、論者がレーンの解釈を斥け、ウィリアムソンによる「ある命題が真であり、また偽でもある」という曖昧な命題についての解釈を支持する理由の一つでもあるが、ここから、レーンが述べる「ある命題が不確定な真理値を持ち得るのみならず、その〈根底にある実在〉も同様に不確定でありうる」という事態がどのようなものとして考えられるのかという問いが浮上してくるであろう。この問題を今後の課題としたい。

¹ パースの著作からの引用は、主に *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols.1-8, Harvard University Press (1931—1958) から行い、CP.5.428 のように前の数字で巻数を、後ろの数字でパラグラフ番号を記した。また、現時点で比較的参照が容易な *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, vols1-2, Indiana University Press (1992, 1998) 該当ページを EP と巻数を表すローマ数字、そしてページ数で表記した。ちなみに、ここに現れる「プラグマティズム」(pragmaticism) とは、パースがジェイムズ的なプラグマティズムと自身の教説を区別するために用いる言葉である。しかし、パース的なプラグマティズムとジェイムズ的なプラグマティズムとの関係をどのように考えるのかという問題について、この論文を含めた一連の論考におけるパース自身の断定を鵜呑みにするわけにはいかない。論者自身もわかりやすくするために、パースのプラグマティズムは「概念の意味を明晰にするための方法論」であり、ジェイムズのプラグマティズムは彼に『真理の意味』(*The Meaning of Truth*, 1909) という著書もあることから「真理の意味を明晰にするための方法論」であると説明することがあるが、正確を期するならば、パースのプラグマティズムは「概念を明晰にするための方法論」(A) であるのに対し、ジェイムズのプラグマティズムは「(真理) という概念を明晰にするための方法論」(B) とするのが適切であろう。当然のことながら、(A) は (B) を包摂すると考えられるので、パースもジェイムズも同じ方法論を用いているものの、その適用範囲が異なるだけだという、両者を調停する穏便な解釈が成り立ちうる。しかし、論者は、ジェイムズが「概念一般」ではなく「(真理) という概念」を問題にしたことこそが、パースとジェイムズが決定的に袂を分かつた点をえないう点であると考え。それは、「概念一般」と「(真理) という概念」が明晰になりうる審級が明らかに異なるからである。パースは前者の審級が後者にも適用されねばならないと考えていたのに対して、ジェイムズは、後者の審級が前者の審級に包摂され得ない特権的な次元にあると考えていたというのが論者の見解である。しかし、この問題については、それ自身が大きな問題(端的に言うならば、哲学が「真理」をどのように扱うべき、もしくは、扱わないでいるべきか、といった問題)であるため、ここでは指摘するにとどめておき、本稿とは別の形で論じたい。

² ここで (to determine proposition's identity) を「命題の対象を確定する」と訳したのは、パースが用いている例を鑑みるならば、「確定する」とは命題の主語になんらかの個体(対象)が入り、その命題の真偽が問える状態になることを指していると考えられるからである。ちなみに、パースは命題の述部の一般性、曖昧性についても論じており、後述のレーンの考察でもそれが論じられているが (CP.5.450, Lane 1997, 691f)、議論の構造そのものは同一と考えてよいので、本稿では単純化のために命題の主語の場合に限った議論を行う。

³ ここでパースが述べる「一般的な命題」とは「全称命題」、そして「曖昧な命題」とは「存在命題」と考えて本稿の範囲内では問題ない。また確定的 (determinate) な命題とは単称命題のことであり、パースの議論はほとんどない。したがって、パースの議論は、いわゆる「量化」の問題をめぐる展開されている。

⁴ このようにパースは一般性と曖昧性を、発話者と解釈者の間での命題の対象を確定する権限という側面から捉え、そして定義しようと試みるが、このような企図はヒルピネンやヒンティ

ツカからゲーム理論的意味論 (game-theoretical semantics)、もしくは意味論ゲーム (semantic game) の先駆としての評価を受けることになる (Hilpinen 1982, Hintikka 1988)。特に、ヒンティッカは、ゲーム理論的アプローチが様相概念へと適用可能であることにパースが気づいていた点に注目する (Hintikka 1988, 27)。後述するが、このような見立てが可能だということに、実は (α) と (β) との間に、ある種の断絶があることの証左なのではないかというのが論者の主張である。

⁵ この「より科学的」というパース自身による形容が、直前の注で述べた (α) と (β) との間にある断絶を示すものと論者は考える。後に詳述するが、(α) は「意味論的・論理的」定義であり、(β) は「科学的」定義、すなわち、実際の科学的探究の場面における命題の振る舞いに着目した定義であると考えるのが妥当であろう。

⁶ このレーンの論文に関して、論者とは異なる観点からではあるが、大学院の演習において院生の吉田廉氏による明解な発表があり、論者の抱いていた疑問のいくつかが解けたと同時に、当該の問題への理解が深まった。特に、以下で述べるレーンによる排中律と矛盾律の (パース的とレーンが考える) 改訂については吉田氏の明確な指摘によって得るところが多かった。この場を借りて吉田氏に感謝したい。

⁷ 先取りしているならば、レーンは当該論文より 21 年後に出版された著書において、パースは最終的に二値原理を放棄せざるを得なかったと結論づけている (Lane 2018, 139 note6 & chapter7)。しかし、そこでもレーンは、この二値原理の放棄と、本稿で議論している「一般的な命題には排中律が適用されない」という議論には関係がない、すなわち、1997 年の論文の姿勢は維持するという立場を採る (ibid.)。ここに論者は疑問を抱かざるを得ない。つまり、最終的にパースが二値原理を放棄しなければならなかったとするならば、ウィリアムソンの解釈の方が採用されるべきであるし、そのことによってむしろ、2018 年の著書でレーンが採る強い主張、すなわちパースの表象主義的な真理および実在観を維持したまま、「曖昧なものの実在」について語る可能性についての足場ができるのではないか。それについては後述する。

⁸ レーンによれば、パースは排中律を否定したのではなく、その適用範囲を限定したにすぎないと考えるべきだと主張する (Lane 1997, 690)。これについては論者も同意する。

⁹ 念のために言うべきならば、ヒンティッカが直接言及しているのは本稿が対象にしているパースのテキストではないが、このテキストを参照しているヒルピネンへの言及を考えるならば、ヒンティッカの考察を用いることに問題はない。

¹⁰ その一方で、パースの論理学を記号論として捉え、この問題に関連して優れた見解を提示しているものとしてベルッチの考察が挙げられる (Belluci 2018, 第 8 章「思弁的文法学 1904-1908」[Grammatica speculativa 1904-1908]、特に 292 ページ以降)。ちなみに、この思弁的文法学とはパースが自身の記号論のモデルにした中世のスコトゥス派のそれを指し、本稿が対象としているパースのテキストでは〈Stechiology〉〈Stoicheiology〉と呼ばれている (CP.5.446, EPII.350)。

¹¹ 一般的な述定の場合は、「誰々は、〈長身〉という言葉のあらゆる意味において、長身だ」と言っていることになり、それを確定する権限は解釈者に委ねられている。したがって曖昧な述定の場合と同じように、これを述語の正当な意味を値として持つ普遍量化文としてパースは理解していたとレーンは述べる (Lane 1997, 695)。

¹² レーン自身は主部における曖昧性と混同するのを避けるために「不明確な述定」(imprecise predication) という言葉を使っているが、本稿では、パースの原文により近い「曖昧な述定」という言葉を用いる。

¹³ この両論文の関係について触れておきたい。WPI の後にパースは「プラグマティシズムの帰結」(The Consequences of Pragmatism)、「プラグマティシズムの論拠」(The Evidences of Pragmatism) という二つの論文を執筆する予定であり、この三つ組みの論文によって一つの体系的な連関を形成することが目指されていた。しかし、後の二つの論文は書かれることがなく、その企図は未完に終わり、その代わりに続いたのが IP と「プラグマティシズム擁護のためのプロレゴメナ」(Prolegomena to an Apology for Pragmatism, 1906) である。したがって、IP は、WPI で一旦は定式化されたプラグマティシズムの成果を示すという形になっている。言い換えるな

らば、IP は半年前に出された WPI への一つの回答を与えるものとなっていると考えてよい。(EPII.331 および Lane 2018, 137 note2 を参照のこと。)

¹⁴ ここで引用した箇所に見える「現象主義」とは、明らかに、ジェイムズ的なプラグマティズム、そして彼の「根源的経験論」(radical empiricism) を念頭に置いた否定的な言及である。

¹⁵ 「実験家」が解釈者であり、「自然」が発話者であるとしたとき、当然のことながら、実験家に対してつれない態度を取る自然が胸襟を開いてくれるという「観察者=自然誌を学ぶ人(博物学者)」とは誰(もしくは「何」)を念頭に置いているのかということが疑問として残る。WPI と IP の議論の流れを見る限り、それは、(パースの定義による、そしてパースが口を極めて批判する)「心理主義者」を指しているのは明らかであろう。当時の心理学は現在の「実験心理学」ではなく、「内観」(introspection) に基づく「内観心理学」であったが、「内観」の能力については「直観」(intuition) と結びつく形で、パースにとって終生にわたって批判の対象であった。さらに、その心理主義者の中に、パースが揶揄を込めて(哲学者ではなく)「傑出した心理学者」として賞賛するジェイムズが含まれるのは間違いないが、それについて論者は不当だと考えるけれども、ここでは触れない。

¹⁶ ミサクがこのような主張を展開する理由は、クワインによる、いわゆるパースの「真理の収束説」批判を回避するためでもある(Quine 1960, 23f)。そのクワインの批判において、パースが真理概念に不用意に「収束」(convergence) という概念を用いていることを批判の要点の一つとしてあげられているが、クワインに対してミサクは、パースは収束ではなく、(研究者の共同体内での)「同意」(consensus) を重視していたと主張し、そこに数学的含意がないとして批判をかわそうとしている(Misak 2004, 122f)。この経緯については石田正人の論文(石田 2012)での考察が詳しいが、石田は「パースは、収束説を何度となく数学的視点から論述しているというのがテキスト上の事実であり、数学的比喩にクワインの指摘するような困難が予想されるからといって、パースの真理論を数学的メタファーから完全に切り離すことにはかなり無理があるだろう」とミサクを批判している(石田 2012, 57-58)。論者も石田に同意するが、ミサクの議論の最大の問題点は、レーンが指摘するような「真理と実在の分離」という事態を招来することにあると考える(Lane 2018, 136, 169)。

¹⁷ 可謬主義をめぐる問題として、それが「閉包原理」(closure principle) と両立可能かという大きな問題があり、パースの議論とも関係してくると論者は考える。基本的にこの両者は相性が良くないと考えられるが、この問題について野上志学氏の博士論文「道徳懐疑論研究」およびその論文についての討議から学ぶことが多かった。この場を借りて野上氏に感謝したい。

[文献表]

- Peirce, Ch. S. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols.1-8, Ch. Hartshorne, P. Weiss, A. Burks, eds. Cambridge, MA; Belknap Press of Harvard University Press, 1931-1958.
- Peirce, Ch. S. *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, vols1-2. N. Houser, C. Kloesel, and the Peirce Edition Project, Bloomington, Indiana University Press, 1992, 1998.
- 石田正人(2012)「C.S.パースの真理の収束説」、日本科学哲学会編『科学哲学 45-1』、47-63 ページ。
- 伊藤邦武(1985)『パースのプラグマティズム』、勁草書房。
- Atkin, Albert. (2016). *Peirce*. New York: Routledge.
- Belluci, Francesco. (2018). *Peirce's Speculative Grammar Logic as Semiotics*. New York: Routledge.
- Hilpinen, Risto. (1982). On C. S. Peirce's Theory of the Proposition: Peirce as a Precursor of Game-Theoretical Semantics. *The Monist*, 65(2), 182-8.
- Hintikka, Jaakko (1988) . On the Development of the Model-Theoretic Viewpoint in Logical Theory. *Synthese*, 77(1), 1-35.
- Hookway, Christopher. (2000). *Truth, Rationality and Pragmatism*. Oxford: Oxford University Press.
- Lane, Robert. (1997). Peirce's "Entanglement" with the Principle of Excluded Middle and Contradiction.

- Transactions of the Charles Sanders Peirce Society*, 33(3), 680-703.
- Lane, Robert. (2018). *Peirce on Realism and Idealism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Misak, Cheryl J. ([1991]2004). *Truth and the End of Inquiry. A Peircean Account of Truth*. (expanded paperback edition [2004]). Oxford: Oxford University Press.
- Quine, Willard van Orman. (1960). *Word and Object*. Cambridge, MA: The MIT Press. (大出晁、宮舘惠訳『言葉と対象』、1984年、勁草書房。)
- Skidmore, Arthur. (1982). On Peirce's Denial of the Law of Contradiction. *Philosophical Topics*, 13, *Issue Supplement, Proceedings of the Southwestern Philosophical Society*, 101-107.
- Williamson, Timothy. (1994). *Vagueness*. New York: Routledge.